

No.2801

中国ムスリムの移動とエスニシティに関する歴史人類学的研究：

19－20世紀中央アジアへの移民

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程

海野 典子

現在、中華人民共和国にはイスラームを信仰する10の少数民族がおり、その人口は2000万にも上ると言われている。そのなかでも最大の人口を擁するのが、回族(約900万人)、及びウイグル(約900万人)と呼ばれている二つの民族集団である。19世紀後半、当時回民と呼ばれていた回族やテュルク系ムスリムであるウイグルが、非ムスリムによる暴力、清朝の圧政に抵抗して中国西北地域の広範囲で蜂起した。反乱に参加したこれらのムスリムの一部は、清朝による弾圧から逃れるために、ロシア帝国領中央アジアへ逃亡した。彼らの末裔は、今もカザフスタンやクルグズスタンに暮らしている。

本研究は、中国領出身ムスリムであるウイグル、及びドゥンガン(回族・回民に対するテュルク語の呼称)のエスニシティ——周囲の集団との相互行為関係のもとに存在するとされる、出自や文化を共有する人間集団の帰属意識——の変容を、中国領からロシア領への移動の記憶に注目して調べた。資料の精読により、以下の2点が明らかになった。第一に、19－20世紀の新疆における回民とテュルク系ムスリムは、日常的に交流があったものの、同一集団としての意識はほとんどなかった。第二に、ロシア領に移住した彼らは、1920年代、中央アジアの民族共和国の境界画定作業を行っていたソ連の影響下で、「ウイグル」という一つのネイションとして団結を試みた際、言語・文化・宗教・歴史記憶の共通性を強調した。結局、両者はウイグルとドゥンガンという異なるネイション認定を受けたが、このことから、中国領からロシア・ソ連領への移住によって、一時的ではあるものの、両者のあいだに同一集団としての意識が芽生えたことを指摘した。

本研究を今後発展させることによって、移動とエスニシティに関する学際的議論を促すとともに、中国、及びロシア・ソ連という巨大な多民族・多宗教国家における民族政策・民族問題を通史的に理解するための視座を提示したい。